

研究課題	「本気」で目指す不登校ゼロ
副題	～不登校生徒の自立と学校復帰の取組と9つのメソッド～
キーワード	不登校、校内フリースクール
学校/団体名	公立岡崎市立福岡中学校
所在地	〒444-0825 愛知県岡崎市福岡町字井杭3番地
ホームページ	<a href="https://cms.oklab.ed.jp/jh/fukuoka/">https://cms.oklab.ed.jp/jh/fukuoka/</a>

## 1. 研究の背景

令和元年10月の文部科学省の通知では、これまで不登校児童生徒への支援は、学校復帰を最終目標としてきたが、今後は「社会的な自立を目指す」という方向に変わっている。長期欠席児童・生徒に対する対応は学校現場の大きな課題となっている中、長期欠席児童・生徒の社会的な自立に向けて、今学校現場は何ができるのかが問われていると言える。

本校においても、長期欠席生徒に対する対応は喫緊の課題となっている。そんな中、令和2年度より岡崎市教育委員会の支援と補助を受け、校内フリースクール（以下F組）を設置した。F組は、教室復帰を最終目標とせず、社会的な自立と定め、新しい長期欠席支援として位置付けている。今までの適応支援教室とは違ったひと・もの・ことを設置することで、生徒にとって学校に新しい居場所となっている。昨年度、F組に在籍していた1年生の4名は、2年生に進級した新学期から、教室へと復帰している。これは教室復帰を目標とはせず、あくまでも社会的な自立を目指して取り組んできたことによる成果であると考え。本研究では、改めてこれまでの事例を見直し、効果的である指導支援の在り方をあぶり出し、校内フリースクールのよりよい在り方を探るべく研究を進めることにした。

## 2. 研究の目的

私たちは当初、研究の目標値として、この不登校生徒数をゼロにするという目標を置いた。この目標を研究及び教育目標に据えることで、校内フリースクールにおける実践をはじめ、授業研究と実践、校内行事の改善、生徒指導の在り方など、全ての教育活動を関係づけて取り組むことが可能になる。また、これまで不登校生徒の指導や支援については、あくまで個別の事案であるとされ、その指導の在り方が一般化されることが少なかった。また、不登校という現象と児童生徒の内面の変容を短期間で検証することに困難な面もあった。ただ、私たちとしては、数年に渡る不登校支援の在り方を一度総括し、不登校支援の指導の在り方を一般化すべく、その『メソッド』（原理原則）を明らかにすることを目的として行った。

## 3. 研究の経過

時期		評価のための記録
R2.4 6月在籍	○校内フリースクール「F組」設置 →スクールソーシャルワーカー（SSW）、スクールカウンセラー（SC）、登校支援員、医療機関等の外部機関との連携やF組担任・学級担任・教科担当との連携 →9つのメソッドを検証開始 ○全生徒・教職員にiPadを1人1台配備	学級担任・F組担任、支援員、SC、SSW、養護教諭等の見取りが中心

	→ライブ配信によるリモート授業	
R3	<ul style="list-style-type: none"> <li>○パーテーションによる仕切り設置</li> <li>→個別ブース確保</li> <li>○大型ビジョン</li> <li>→リモート授業や行事等の配信映像を鑑賞</li> <li>○3Dプリンター・常設パソコン設置</li> <li>→アート作品作りやビデオ編集など</li> <li>○毎週金曜日「Fcafe」開催</li> <li>○出前授業（教科担当がF組で行う授業）F合奏・革細工・クラフト・3Dプリンターによる造形・調理実習など</li> <li>○F組独自の校外社会見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日記</li> <li>・学期ごとの振り返り</li> </ul>

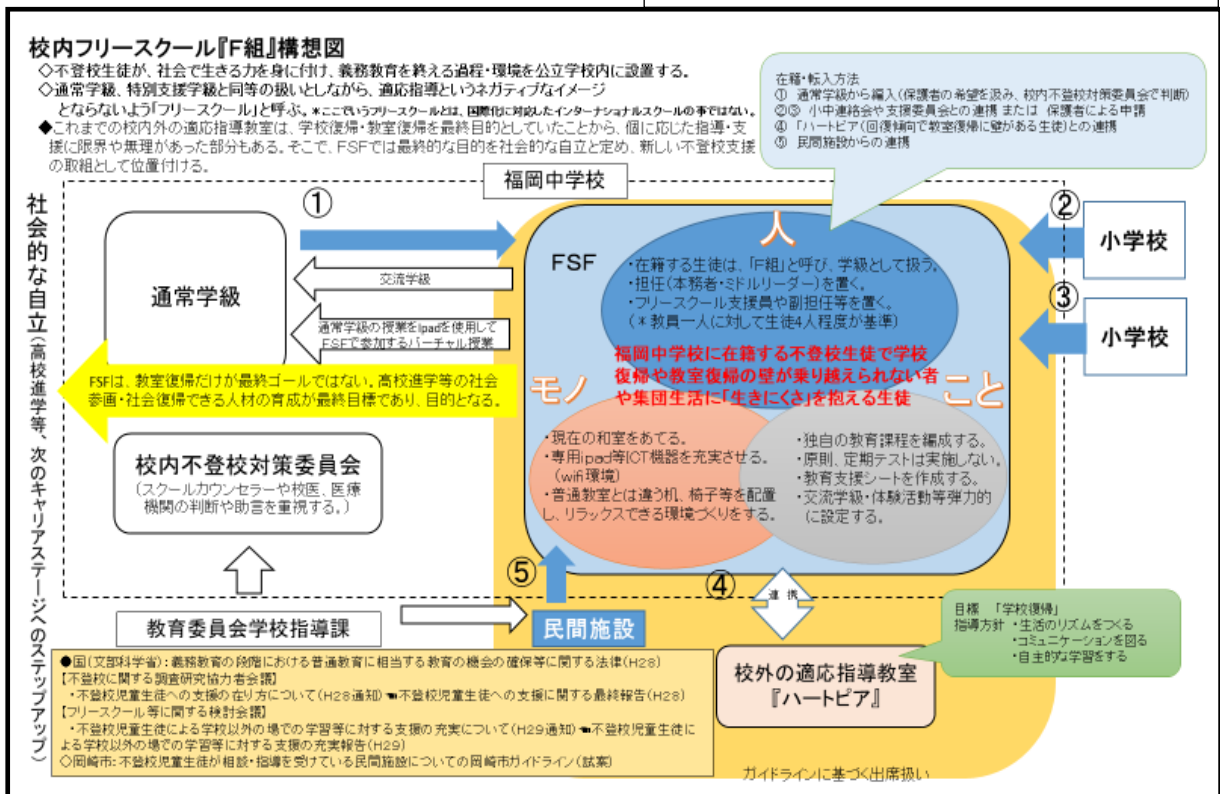
4. 代表的な実践

メソッド①「不登校はひとつの現象にすぎない。今、その生徒はどんな支援を必要としているかを正確に見取ることが必要である。」

(1) F組とは

本校は、パイロット校として校内フリースクールを設置し、教育委員会と連携して新たに「ひと・もの・こと」を配置し、課題を抱える生徒の支援を行っている。

資料① 校内フリースクールF組構想図



資料①にあるようにF組は適応指導教室の発展形でありながら、大きな特徴として次の3つがある。  
 ① F組の目的は最終的に社会的な自立であり、必ずしも学級復帰を目指すわけではない。  
 ② F組の指導方針は、生活のリズムをつけることの他にコミュニケーション能力を高めること

や学力をつけることである。③F組は一つのクラスである。従って担任が配置される。

また、入級を勧める生徒は、不登校、登校しぶりの生徒の他、発達障害をもっていたり、外国籍で日本語によるコミュニケーションが苦手な生徒であったりする。いわゆる日常生活に困り感のある生徒を本人保護者の希望をもとに受け入れている。令和2年度の本校の場合、在籍生徒の推移は、以下のようなものである。

	6月	8月	10月	12月
在籍生徒	3	4	8	10
内：不登校	2	2	3	3
学年別	①0②1③2	①0②3③1	①3②3③2	①4②4③2

上の表と前年度の記録から不登校生徒は、6月の段階で3名減少していた。また、学年別では、2学期になって1年生の生徒が増えていることがわかる。F組の設置は、不登校生徒の回復だけでなく、未然防止に効果も高い。今年は6月まで学校休業があったり、分散登校があったりして生徒も不安定な精神状態となっていた。資料②の登校しぶりをみせた生徒Bへの支援の記録からは、不安を持つ生徒の様子とF組を利用した適切な支援の様子がよくわかる。

**資料② 教育記録 生徒B**

- ・6月から通常授業が始まり2週間経った。友達とのトラブルで学校を休みがちになった1年生徒Bとその保護者に養護教諭が連絡し、「保健室やF組があるから来てみたら？」と声をかけた。この時、この生徒は1日だけF組で体験をした。事前に学級担任とF組担任が生徒Bについて情報を共有していた。F組で過ごしたことには好印象だったため、動き出すのを待っていると2学期になったある日、自らの意思で登校し始め、今は、F組を中心に過ごしながら、通常学級や部活動へ参加するようになった。(F組担任)

**メソッド② F組は、新たな一人を生まない効果が高い。**

(2) ケースとメソッド

〈①F組での成長とは自己肯定感を高めるということ〉

校内フリースクールが校外の適応指導教室と違う点は、学校内にあるということである。F組生徒は学習面で困難を抱える生徒が多い。学習の補填という消極的な学びで終わらず、興味関心のある学びをとことん追究する機会を与えることで自分の良さや強みを発見することができる考えた。そこで校内の特別教室を積極的に活用し、技能教科の担当教師による学習を行った。

ある日、音楽室でギターを見つけた生徒Aがギターを上手に演奏すると周りの雰囲気が一気に明るくなった。ピアノが弾ける生徒Cも一緒に歌い、文化祭のフェスタに参加しようという話がまとまり、練習をするためにF組に登校する日が増えた。(資料③)

また、F組では1週間の中で必ず体を動かす活動をしている。体を動かす活動は、生徒のエネ



資料③ギターの練習中「Aちゃん上手いね。文化祭、一緒に出ない?」「うん」「私もピアノやりたいな」

ルギーを引き出し、コミュニケーションが生まれるよい活動の場となっている。

**メソッド③ F組の活動を通して、自分の得意なことや苦手な事を見つける。得意なことを強みにすると、自尊感情が自己肯定感にまで高まる。**

#### 〈②F組で見える『チーム学校』の在り方〉

本校のF組において担任の役割は大きい。まず、F組の活動をオーガナイズしなくてはならない。生徒が登校するとホワイトボードにその日の活動内容を記入する。生徒が主体だが担任や不登校支援員が助言する。さらに、活動中の指導や支援は一人ひとりを丁寧に見取った声掛けや活動場面の設定が必要となる。つまり、F組の担任は、コーディネーターの役割を担っている。また、市で独自に配置したフリースクール支援員は、生徒に寄り添って活動や学習のガイドをするファシリテーターとしての位置づけがよい。この大人が寄り添う姿勢が生徒の安心感を引き出し、F組の穏やかな空気感の一因となっている。

通常学級の担任は自然に、一緒に体を動かしたり、話をしたり、時に授業の内容を教えたりする伴走者（エスコートランナー）としての役割に徹するように心がけている。生徒の横に座り、お互いが同等の立場を意識して話すことで、生徒が安心して困っていることや相談ごとを打ち明けることができ、「嫌なことは嫌」と言える雰囲気が高まると考えた。さらに、養護教諭、やSC等の専門家は、なるべく生徒とともに活動しながら、見取ったり、カウンセリングを行ったりするように心がけている。こうして、生徒の活動をそれぞれの立ち位置で支えることが軌道に乗ってくると生徒主体のチームが出来上がると考える。

**メソッド④ F組担任はコーディネーターとして、F組支援員はファシリテーターとして、通常学級の担任はエスコートランナーとして、生徒を取り巻くことで、生徒を中心としたチームができあがる。**

#### 〈③『F組＝学校復帰』という意味と課題〉

本校のF組は、来賓玄関奥にあり、生徒昇降口とは離れたところにあるため、在籍生徒は、他の生徒と会わなくても登校できるようになっている。F組が学校内にあることのメリットは大きい。例えば、校外の適応指導教室で心のエネルギーがたまって、学校復帰の壁やタイミングの調整が大変である。だが、F組で過ごすことは、すでに学校復帰ができているということになる。Teamsを使ったリモート授業で通常学級の授業に参加することは、F組から遠隔でIpadの操作をすることができるので、生徒自身が参加しているかのような感覚で授業を受けることができる。(資料④)また時々教室の授業に参加できる日もある。これには、F組所属の生徒たちを学校全体が理解し、学級と行き来する生徒に対し、いつも通りに接する生徒たちの寛容な態度が必要となる。



資料④ リモート授業。記録もIpadで。

4月の入学式・始業式の式辞に、「心の保健室」としてのF組の開設について触れ、校長室だよりを発行した。公式にF組の設置を校内外や学区に周知した。それでも、F組は特別なところ

という認識はすぐに払拭されないだろうと思っていたが、学校休業明けの登校後、すぐに登校し  
ぶりとなった生徒の保護者は自ら「F組は入れますか」と問い合わせた。困り感のある生徒や家  
庭には、こうした情報で安心感が生まれたことが伺えた。

**メソッド⑤ 学校に保健室があるようにF組は「心の保健室」だという認識を校内の全ての生  
徒と教職員が共有する。**

〈④待つという支援〉

**メソッド⑥ 不登校支援の最も大きな支援は「待つ」ことである。その子にはその子の暦があ  
る。**

生徒 B（前述資料②）は、友人とのトラブルで欠席が続き、F組の体験を7月に実施したが、  
その後の登校は一切なかった。ただ、心配する母親のカウンセリングは、SCが定期的に行って  
いた。対人的な不得手が本人の中にあることを担任は把握しつつ、小学校で不登校経験がなく、  
中学校ギャップのようにスタートが上手く切れなかったことが大きいと判断し、学校の情報は  
伝えつつ、暫く待ちの姿勢を貫いた10月下旬、生徒Eは突然登校した。F組では、興味を持っ  
たプログラミングをマイタブレットで行ったり、同学年の在籍生徒と楽しくしゃべったりして  
あっという間に滞在時間が増えていった。今では、部活動や長距離走大会等に参加し、積極的に  
体を動かしている。本人に聞いてもどうして動き始めたのかよくわかっていない。体が自然に動  
いた感覚だという。

資料⑤から分かるように11月12  
月と欠席はない。まさにその子に  
とっての暦であるように感じる。

月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
授業日数	21	11	19	20	19	17
欠席数	21	11	19	15	0	0

資料⑤ 生徒Bの欠席数

〈⑤医療機関につなげる〉

**メソッド⑦ 不登校生徒の中には、発達障害の傾向がみられるものも少なくない。  
大切なことは、それを自覚し、生きていく術を身につけることである。**

開設当初の在籍生徒は3名だったが、2学期末には、在籍生徒は10名程度、日々7、8名は  
登校し、F組はなかなか密な状態となっていた。この子たちの多くは、通常学級での生活に何か  
しらの生きにくさを抱えている。校外のフリースクール通所生だった生徒Aは、学校休業明け  
はスムーズに登校し、自分の強みも発見すると同時に学力も伸びていき、夏休み前後は、通常学  
級に復帰するまでに成長した。ただ時々不安を持ち、F組で心を整えつつ、心療内科を受診した  
際、HSPという診断結果を得た。このことは逆に本人を安心させ、通常学級で級友に告げると  
いう機会を持った。「多くの音は苦手」「時々、耳を抑えてもそれは拒否しているわけではない」  
素直に話す生徒Aに他の生徒も共感した。このことで、生徒Aの教室に入る壁はさらに低くな  
ったようである。

〈⑥生徒と学校が繋がる〉

**メソッド⑧不登校はなくなる。だが、一人の「独り」を救い、繋がることはできる。**

不登校という現象だけを見ると本質が見えない。本校は本年度から不登校生徒は「今、支援を  
必要としている生徒」という定義で『要支援生徒』と捉えるようにしている。本校で捉える令和  
2年度の要支援生徒は12名となっている。このうちF組利用者は11名である。つまり支援が

必要な生徒の殆どは、学校と繋がっている。

### 5. 研究の成果

F組運営は、生徒の強みを伸ばし、個々の困り感にチームとして寄り添いながら、生徒主体で進めていった。これにより要支援生徒の学校復帰や未然防止に効果的であった。さらに、他の生徒にも教室とF組を行き来する生徒たちを温かく、そして自然に受け入れる空気が出来上がってきた。また、それを支える教師集団も、F組に自然に足を運び、学年学級を問わず、生徒にかかわる雰囲気が生まれたことは大きな成果と言える。

不登校という定義より、今支援を必要として生徒という視点で見取することで、生徒の困り感を把握し、組織的に対応することができるようになった。そして、いくつかのメソッドを明らかにすることができた。令和2年度にF組に在籍した生徒Bを含む1年生4名は、本年度の2年生4月に教室復帰をし、ほとんど休むことなく1年間教室で過ごすことができた。F組は、通過地点を目指しているわけではない。生徒Aのように学級と行き来しながらもF組生徒として卒業し、新たな進路に進んでいくことができたことも大きな成果である。私たちは、これまでの事例を通して、メソッド⑨にたどり着いた。

**メソッド⑨ 心にエネルギーを貯め、自己肯定感が高まった生徒は、自然に「みんなの中で生きたい」と思うようになる。…自分の意志で思うようになる。**

### 6. 今後の課題・展望

本年度、新たな試みとして「Fcafe」を開いた。週に1度、教員を客として喫茶店を行う。コミュニケーションが苦手な生徒もよく知っている先生になら笑顔で接客ができる。音楽が得意な生徒の実態を見取り、音楽教師に教わりながら「F合奏」に挑戦したり、F組独自の校外学習を計画したり、生徒発信で様々な活動が生まれた。しかし、生徒たちの個性はまちまちであり、状況や状態も違う。時には負担になってしまうこともある。受験期を迎えた3年生と1・2年生が同じ教室におり、勉強への取り組みぶりの意識の差から集中できる空間を求めて違う空き教室へ行く生徒もいた。本年度、F組在籍は、15名となり、部屋が手狭に感じられるほどの人数になった。しかし、それぞれの生徒一人一人に最適な支援を見つけれられるよう「9つのメソッド」をさらに検証し、「チーム学校」で今後も模索し続ける必要がある。

### 7. おわりに

F組を確かな心の居場所とする生徒たちを温かく理解し、受け入れる雰囲気が学校全体に広がっている。令和4年1月4日毎日新聞に掲載された記事には、同じ気持ちで踏み出せない子の力になりたいとF組のPR動画を作るF組生徒の姿があった。「誰かの役に立ちたい。」F組で過ごす中で自分を認め、前を向いて進んでいこうとする力強さを感じた。



資料⑥ 毎日新聞の記事 (R4. 1. 4)